

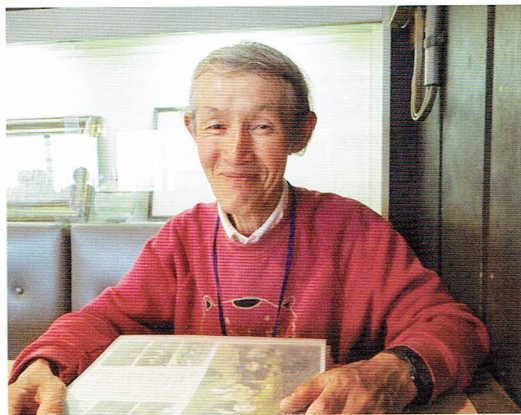
放っておいたら 自慢の桜並木が危ない!

——市民の保全活動が小中高の課外授業に

シニアライフアドバイザー 松本すみ子

国立が好きになった!

外国から本を輸入する会社で働いていた大谷和彦さん（69歳）が自然保護ボランティアに初めて関わったのは、今から50年ほど前。野鳥や自然観察の講座を受講したら、代表者がいなくなってしまう、手伝ってほしいと頼まれたことだった。大谷さんは「そのボランティアがいまだに続いていて、どんどん増えているという状況です」と笑う。



くにたち桜守代表の大谷和彦さん

主に多摩地域で活動をしてきて、実は、桜よりも湧き水の保全や多摩川の清掃活動のほうが先だった。清掃活動には子供たちが毎回300〜600人くらい集まる。野鳥と植物観察と水質検査にごみ拾い。それが終わったら、みんなで多摩川の土手でうどんを食べる。これが楽しい。うどんの費用は市民やロータリークラブからの支援だ。多摩信用金庫の多摩ライフ倶楽部「歩いて多摩地域を知ろう」という企画にも、最初から関わっている。これは定年を迎えた多くの人が何をしたらいいかわからない、地域のことも知らないという状況への対策として始まったものだ。なかでも、最も愛着のあるのが国立。再開発の前は三角屋根の風情ある駅舎が有名だった。駅前からのびた広い並木道。多摩川が近く、当時はまだレンゲの原っぱが残っていた。そして、あちこちで湧き出す水。「すぐく、このまちが好きになっちゃった」のだ。

東京の西に位置する国立市。駅から一橋大学の間を通って、まっすぐ南に2kmほど続く44m幅の「大学通り」は市民の誇りだ。両側には現在の天皇（平成）の誕生を祝って植樹された桜が170本ほど並び、春には爛漫の花で市民を楽しませる。その桜に異変が起きていることに気づいたのは大谷和彦さん。以来、「くにたち桜守」の代表として桜の保全活動を展開しながら、子供たちに自然の大切さを教えている。



桜の時期の大学通り

だから、国立の生き物図鑑を市民と共同で作るという市の企画には、真っ先に応募した。1年目に調査し、2年目に編集して出版するという。まじめで熱心な大谷さんは1年間で全種類の写真を撮りたいと張り切った。しかし、昆虫など生き物に詳しい参加者は少なく、同じような写真はばかり集まる。写真は増えても、使える資料は増えない。これでは失敗すると考え、この活動に専念すると決めて、仕事を辞めてしまった。そして、せっせ

と写真を撮りため、翌年には編集から、カット、レイアウトまで手がけて、出版にこぎつけた。その図鑑は今でも販売されており、学校での授業にも使われている。

桜の木はつらいよ

「くにたち桜守」はそうした活動の中で、必然的に始まったといえる。ある日、国立の桜通りを歩いていた大谷さんは、ふと見上げた桜の木の皮がペロンと剥がれていることに気づいた。よく見ると、あちこちに傷んだ木が見える。心配になり、市役所に行つて、「桜の木が傷んでいるようなのですが、大丈夫ですか」と聞いた。



見るからに傷んでいる桜の木